

# 日本語学習者が考える「優れた」日本語教師像に関する研究 —ベトナムの大学生を対象として—

Do Hoang NGAN

大学院生

広島大学大学院国際協力研究科

739-8529 広島県東広島市鏡山1丁目5番1号

E-mail: hndo2611@yahoo.co.jp

小林明子

大学院生

広島大学大学院教育学研究科

729-3302 広島県世羅郡世羅町川尻418

E-mail: kobayashi@hiroshima-u.ac.jp

## 1. はじめに

日本国際交流基金2006年度海外日本語教育機関調査によれば、全世界の日本語学習者のうち学習者数が多い国・地域を多い順に10カ国あげると、韓国、中国、オーストラリア、インドネシア、台湾、米国、タイ、香港、ベトナム、ニュージーランドとなる。とりわけ、これらの国々の中でも、2003年から2006年にかけて学習者が著しく増加しているのは、中国、インドネシア、台湾、香港、ベトナムである。しかし、日本語教育が盛んとなりつつある上記の国々では、有資格の日本語教師が不足しており、専門的訓練を受けた日本語教師の養成が急務となっている。

このような現状を踏まえ、本稿では、海外の学校日本語教員養成カリキュラムの開発・検討のための基礎的調査として、日本語教師が備えるべき資質を検討することとする。これまでの研究では、日本語教師に求められる資質とは何か、「優れた(outstanding)」日本語教師とはどのような教師かについて、様々な調査・議論がなされてきた。特に、教師、学習者、教育機関、研究者の誰が考えるかによって、

導き出される日本語教師の資質が異なることもあり、これまで数多くの資質が提案されてきた。しかしながら、この問題について考えるうえで、指導する側からのみ提言を行うのではなく、実際に授業を受ける学習者の立場からも望ましい日本語教師像を明らかにし、両者を調整・統合化していくことが必要である(縫部他2006)。そこで本研究では学習者側からの視点に着目し、日本語学習者はどのような教師を望ましいと考えているのかを明らかにする。

また、どのような日本語教員を養成するのかという問題は、少なくとも次の2つの観点から考える必要がある。第1はどのような日本語教育を行うのか、第2はそのためにどのような教師を育てるのか、ということである。本稿では後者に関して、具体的な教授行動の面から日本語教師が備えるべき資質を解明するために、教師の「行動特性(characteristics of behaviors)」(Moskowitz 1976)に着目する。ここで言う「行動特性」とは、教師の性格特性、学習者との相互作用、指導方法・指導技術・教室経営などの教授行動を総称する用語である。このような教師が備えるべき行動特性を検討することは、授業の改善や日

本語教員養成場面の基礎的資料となりうると考えられる。

なお本研究の目的を達成するためには、様々な海外の国・地域の学習者を対象とした調査が考えられるが、本研究では国際調査の一環として<sup>1</sup>日本語学習者数が約1万8千名存在し、高等教育機関における日本語教育が盛んであるベトナムを調査対象とする。

## 2. 先行研究

外国語教師像を明らかにすることを目的とした先行研究には、英語教育の分野で保坂(2004a), 保坂(2004b)がある。保坂(2004a)は、高校生220名と高校の英語教師20名を対象に、理想的な英語教師像について自由記述をしてもらい質問紙を作成したうえで、高校生296名に質問紙調査を行った。探索的因子分析の結果、学習者が求める英語教師像は、「受験学力がつく質の高い授業をする」「知識・教養が豊かである」「生徒の立場に立った授業をする」「カウンセリング・マインドを持って生徒に接する」「厳しい指導で英語力をつける」「英語の高い運用能力を持つ」という6因子から構成されていた。この結果を踏まえ、保坂(2004b)では、高校生109名を対象として、成績によって英語教師像に対する考え方が異なるかどうか共分散構造分析を用いて検討した。英語の成績によって学習者を2グループに分けて検討した結果、成績上位グループは受験やコミュニケーション能力向上といった具体的な目標達成のための手助けを求めていることが示された。また、下位グループは、学習者の感情に配慮しつつ、英語の成績を向上させることを教師に期待していた。これらの調査から、理想的な英語教師像には、授業の実践能力や、幅広い知識、英語力に加えて、学習者への厳しさと配慮のバランスが求められることが示された。さらに学習者の中にも多様な視点があり、成績など属性によっても求める教師像が異なる可能性があることが示唆された。

日本語教育の分野では、国際日本語普及協会(1987)が国内の留学生を対象として「日本語教師にとって必要不可欠な条件」について、質問紙とインタビューによって調査した。記述統計の結果、「楽しい授業・学習者に応じた柔軟な授業ができること」が最も重視されており、次いで「日本語教師の日本

語力(目標言語の知識・技能・運用能力)や広い教養(日本事情・世界事情の知識)、最後に「人間的優しさと教職経験」が求められることが示唆された。また、海外で日本語を学ぶ学習者を対象としたものに、渡部他(2006), 縫部他(2006), 佐藤・渡部(2008)がある。渡部他(2006)は、ニュージーランドの高校生280名と大学生222名を対象として、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方を質問紙調査によって検討した。探索的因子分析の結果、高校生も大学生も「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示唆され、その構造は「授業の実践能力」「専門的知識と教養」「教室の雰囲気作り」「学習者への配慮と教職意識」「指導経験と資格」「日本語能力と文化的知識」という6因子から構成されていた。このことから、ニュージーランドの日本語学習者が考える「優れた」日本語教師には、実際に授業を行ううえで必要とされる知識や指導技術、指導経験や資格に加えて、情意的側面における学習者への配慮や雰囲気作りが求められることが示唆された。また、学習年数の長さによって学習者を3グループに分け、共分散構造分析による分析を行った結果、学習年数によって学習者が教師に求めるものが異なることが示された。

縫部他(2006)は、渡部他(2006)の研究を踏まえ、海外の日本語学習者が持つ教師像を幅広く把握するため、6つの国と地域で学ぶ日本語学習者1441名を対象に質問紙調査を行った。探索的因子分析の結果、どの対象国においても「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示され、その構造は「日本語教師の専門性」「指導経験と資格」「教師の人間性」「コース運営」「授業の実践能力」の5因子から成り立っていた。また、共分散構造分析を用いて対象国による相違を検討した結果、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が対象国によって異なることが示された。この研究では(1)「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が国によって異なることが明らかにされたが、各国の特徴について詳細な分析ができなかったこと、(2)因子分析の方法について、より信頼性の高いモデルを提案するには分析方法を精査する必要があることが課題として残された。

以上の課題を踏まえ、佐藤・渡部(2007)は、統計処理の方法を検討したうえで海外の日本語学習者が

持つ教師像の共通点を見出すことを目的としてより信頼性の高いモデルを検討した。調査に用いたデータは、上述の縫部他（2006）と同様であったが、学習者の属性が結果に与える影響を考慮し、欠損値が見られたデータおよび学習年数4年以上、日本滞在歴1年以上の学習者のデータを除去したうえで再度分析した。結果として、5つの国と地域（タイ261名、韓国225名、中国256名、ベトナム152名、台湾118名）で学ぶ日本語学習者1012名が分析対象となった。探索的因子分析の結果、どの対象国においても「優れた」日本語教師を同様の枠組みで認識していることが示され、その構造は「授業の実践能力」「教室の雰囲気作り」「学習者との関わり方」「日本文化の知識」の4因子から成り立っていた。また、共分散構造分析を用いて日本語学習年数による相違を検討した結果、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が学習年数によって異なることが示された。日本語学習年数1年未満のグループでは、学習者との対人関係に関わる「教室の雰囲気作り」「学習者との関わり方」という教師の行動特性が重視されていた。一方、学習年数1年以上のグループでは、日本語授業そのものに関わる「授業の実践能力」と「教室の雰囲気作り」が重視される傾向が見られた。さらに、学習年数2年以上のグループでは、「授業の実践能力」を重視する傾向が見られた。このことから、特に、学習の初期段階においては、指導技術のみでなく、忍耐力、媒介語の使用、褒め・励ましなど学習者との関わり方が重視されることが示された。以上の先行研究から、海外の日本語学習者が求める「優れた」日本語教師に共通した資質が明らかとなった。

しかし、縫部他（2006）、佐藤・渡部（2007）においては調査対象となった国・地域の学習者数に偏りが見られ、特に他の国・地域と比較して台湾・ベトナムの調査対象者は少ない。そのため、これら2カ国に関しては、さらに調査対象者を増やすことでそれぞれの国の学習者の考え方をより反映した結果を得られる可能性がある。そこで、本研究では、調査対象国をベトナムに絞り、縫部他（2006）、佐藤・渡部（2007）で用いられたデータからさらに対象者を増やしたうえで、ベトナムの大学生が考える「優れた」日本語教師像を再度検討することとした。また、学習者の学習歴や学年によって考え方が異なるという先行研究の示唆から、本研究では学習者の学年に

よって考え方に相違があるかどうかについても検討することとする。ベトナムの日本語教育事情から、大学生の場合、学年は学習年数と同義であり、調査結果について教育機関で参考にしてもらいやすいため、本研究では学年に着目することとした。

### 3. 調査概要

#### 3.1. 調査目的

調査目的は、ベトナムの大学で学ぶ日本語学習者が考える「優れた」日本語教師の行動特性を明らかにすることであった。さらに学年による考え方の相違についても検討した。

#### 3.2. 調査期間

調査は、2004年11月から2005年6月、2007年10月から12月の間に実施した。

#### 3.3. 調査対象者

調査対象者はベトナムの4大学で日本語を学ぶ大学生794名で、未記入が含まれた回答紙を除外した結果、742名のデータが分析対象となった（有効回答率93.45%）。性別は、男性75名、女性667名で、全員母語はベトナム語であった。学年は、1年生181名、2年生162名、3年生244名、4年生155名であった。

#### 3.4. 調査方法

調査方法としては、対象者が考える日本語教師像の枠組みを明らかにするという目的を達成するため、より多くの学習者の考えを収集・分析することができる質問紙法を用いた。調査の実施においては、各大学の日本語担当教師に郵送で調査を委託し、集団形式で質問紙に回答を求めた。質問紙の作成にあたっては、Moskowitz（1976）による「優れた」外国語教師の行動特性に関する質問項目を参考とした。Moskowitz（1976）は、外国語教師と教育行政関係者を対象に「優れた」外国語教師に見られる特徴をインタビューによって収集した。その結果得られた110項目を用いて、外国語教師、教育行政関係者および

高校生を対象とした質問紙調査を実施し、項目を精査している。これらの質問項目の内容は、教師が用いる教授法、教室経営、学習者との相互作用、教師の性格特性などから構成されているため本研究の調査目的とも合致しており、実際に教師および学習者に対する質的調査から得られたものであることから参考とした。なお本調査では、Moskowitz (1976) の質問項目を日本語学習者用に修正した41項目を用いた(資料参照)。調査対象者は、各項目に関して「優れた」日本語教師が備えているべきだと思うかどうかを4件法で回答した。

### 3.5. 分析方法

分析は以下の手順で行った。まず、本調査の対象者が考える「優れた」日本語教師の行動特性の構成概念を検討するために、Stepwise Variable Selection in Exploratory Factor Analysis (SEFA)<sup>2</sup>を用いた探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。SEFAの分析結果を解釈する際には、複数の適合度指標を参考とした。適合度指標とは、想定したモデルのデータへの当てはまりのよさを表す指標(狩野・三浦 2002)であり、本研究ではカイ2乗値、CFI (comparative fit index : 比較適合度指標)、RMSEA (root mean square error of approximation : 平均二乗誤差平方根)という適合度指標を用いた。山本・小野寺 (1992)によれば、カイ2乗値とは、「モデルが正しい」という仮説を検定するものであり、値が有意でない場合、モデルがデータに適合するとみなす(調査対象者が数百を超えない場合であれば、 $p > .05$ )。CFIは、0から1.00の間の値を取り、値が1.00に近いほど説得力があるとされるもので、モデルを採択するにはCFIが0.90以上であることが一つの目安とされている。また、RMSEAは、その値が0に近いほど良いと考えられており、値が0.05以下であれば適合度が高いとされている。さらに、探索的因子分析から得られた因子構造の妥当性を検証するため、Amos 5を用いて検証的因子分析<sup>3</sup>を行った。

最後に、「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方が学年によって異なるかどうかを検討するために、共分散構造分析を用いた多母集団の同時分析<sup>4</sup>を行った。分析結果を解釈する際には、カイ2乗値、CFI、RMSEA、AIC(赤池情報量基準 : Akaike's

information criterion)という適合度指標を用いた。AICとは、複数のモデルを比較して最良のモデルを選択するときに使用する指標で、値が小さいモデルほど優れていると判断される。

## 4. 結果

### 4.1. 「優れた」日本語教師の行動特性

SEFAによる分析の結果、解釈可能な4因子が得られ、モデルの適合度は、 $\chi^2(41) = 25.53$  ( $p > .05$ )、CFI=1.00、RMSEA=0.00となった。このことから、すべての適合度指標が基準値を上回っており、モデルの適合度が良好であることが示された。SEFAから得られた因子構造、因子負荷量を表1に示す。

次に、探索的因子分析から得られた因子構造の妥当性を検証するために共分散構造分析による検証的因子分析を行った。4つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った結果、適合度指標は、 $\chi^2(71) = 135.04$  ( $p > .05$ )、CFI=0.96、RMSEA=0.04となり、想定したモデルは本調査対象者のデータを十分に表していることが示された。

以上の分析から得られた4因子は以下のように命名した。第I因子は、実際に授業を行ううえで必要な日本語力・知識・指導技術に関する項目で構成されていたため、「I 授業の実践能力」と命名した。第II因子は、和やかな授業雰囲気醸成するために必要な教師の忍耐力や思いやりに関する項目で構成されていたため、「II 暖かい態度」と命名した。第III因子は、教師の学歴、資格、外国語学習の経験や能力に関する項目で構成されていたため、「III 資格と外国語能力」と命名した。第IV因子は、コース全体を運営する際に求められる専門知識・技術に関する項目で構成されていたため、「IV コース運営」と命名した。

### 4.2. 学年による相違

次に、学年によって「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念にどのような違いがあるかを明らかにするため、調査対象者を学年によって4グループに分割して分析を行った。この4グループを比較するため、配置不変および、因子パターンと観

測定数の切片を等値として強測定不変を仮定した上で、共分散構造分析を用いた多母集団の同時分析を行った。その結果を表2に示す。表2の8つのモデルのうち、よりデータに適合している（AICの値が最

も低い）モデル4を採用して解釈した。このモデル4は、因子構造、因子間相関、各因子の分散が等値で、各因子の平均のみが異なっていることを示している。

表1 SEFAの結果

質問項目/因子	因子負荷量			
	I	II	III	IV
<b>第I因子：授業の実践能力</b>				
Q13 学習者が分からないとき、分かりやすく説明する	0.76	-0.03	-0.09	0.10
Q16 学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる	0.58	0.08	0.25	-0.19
Q4 標準的な日本語を話すことができる	0.51	-0.12	0.03	0.05
Q14 学習者からの提案や考えを取り上げる	0.50	0.09	-0.08	0.20
Q10 日本語を1つの言語として客観的に分析することができる	0.41	0.12	0.20	-0.11
<b>第II因子：暖かい態度</b>				
Q28 大きな忍耐力がある	-0.10	0.80	0.03	0.01
Q21 暖かく、やさしく、思いやりがある	0.03	0.50	-0.06	0.04
Q7 異なる言語や文化に対する寛容性がある	0.06	0.30	-0.06	0.04
Q40 学習者の感情を受け入れる	0.05	0.27	0.21	0.23
<b>第III因子：資格と外国語能力</b>				
Q36 修士号(又はそれ以上の学位)を持っている	-0.14	-0.09	0.65	0.14
Q39 以前に外国語学習の経験がある	0.00	0.06	0.42	0.08
Q25 学習者の母語(又は媒介言語)で説明することができる	0.19	-0.12	0.37	0.06
Q30 日本語教育に関する資格を持っている	0.15	0.10	0.35	-0.05
<b>第IV因子：コース運営</b>				
Q38 学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる	0.01	0.04	0.18	0.60
Q32 達成度、熟達度など、目的に応じてテストが作成でき、その結果を統計的に解釈することができる	0.01	0.23	0.06	0.36
Q31 授業を面白く、楽しくする	0.29	0.25	-0.08	0.34

表2 多母集団の同時分析における適合度指標の比較

	$\chi^2$	<i>df</i>	CFI	RMSEA	AIC
モデル0：配置不変+強測定不変	553.69	381.00	0.90	0.03	743.69
モデル1：モデル0+共変動が等値	574.52	399.00	0.90	0.02	728.52
モデル2：モデル0+因子分散が等値	570.16	393.00	0.89	0.03	736.16
モデル3：モデル0+因子平均が等値	591.78	393.00	0.88	0.03	757.78
<b>モデル4：モデル1+モデル2</b>	<b>584.69</b>	<b>411.00</b>	<b>0.90</b>	<b>0.02</b>	<b>714.69</b>
モデル5：モデル1+モデル3	612.88	411.00	0.88	0.03	742.88
モデル6：モデル2+モデル3	607.42	405.00	0.88	0.03	749.42
モデル7：モデル1+モデル2+モデル3	622.06	423.00	0.88	0.03	728.06

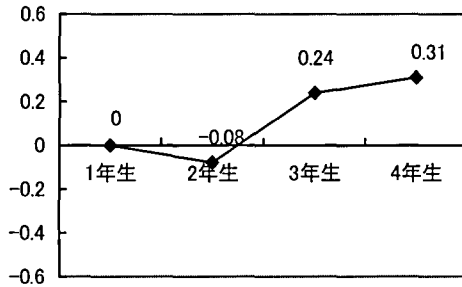
表3 多母集団の同時分析の結果（因子間の相関係数）

学 年	I	II	III	IV
I 授業の実践能力	1.00			
II 暖かい態度	0.59	1.00		
III 資格と外国語能力	0.40	0.65	1.00	
IV コース運営	0.59	0.46	0.66	1.00

表4 多母集団の同時分析の結果(因子平均/因子分散)

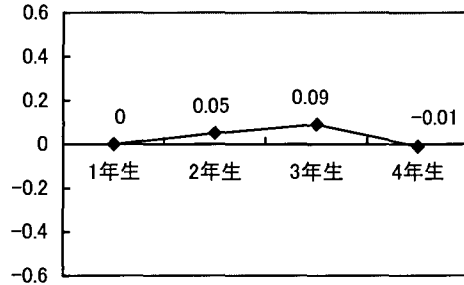
学年	1年生	2年生	3年生	4年生
I 授業の実践能力	3.44 / 1	3.47 / 1	3.39 / 1	3.35 / 1
II 暖かい態度	3.21 / 1	3.12 / 1	3.03 / 1	2.99 / 1
III 資格と外国語能力	2.80 / 1	2.74 / 1	2.70 / 1	2.68 / 1
IV コース運営	3.27 / 1	3.28 / 1	3.20 / 1	3.18 / 1

因子平均 I 授業の実践能力



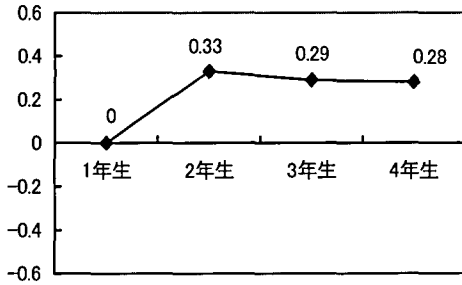
学年

因子平均 II 教師の人間性



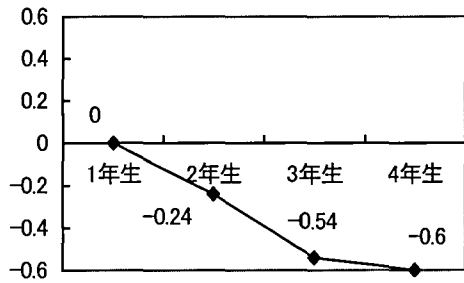
学年

因子平均 III 資格と外国語能力



学年

因子平均 IV コース運営



学年

図1 学年による因子平均の違い

注) 比較のため、1年生のグループの因子平均を0に固定し、その他のグループとの相違を検討した。

この結果、学年によって、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念に違いは無く、各因子の平均に相違があることが分かった。このモデル4の解を表3(因子間の相関係数)、表4(各因子の平均、分散)に示す。さらに4グループの差を視覚的にわかりやすくするため因子平均については図1にまとめた。なお、図1は、因子間の数値を比較するものではなく、各因子における学年別の得点を比較する

ものである。比較のため、1年生のグループの因子平均を0に固定し、その他のグループとの相違を検討した。図1の因子平均を見ると、「I 授業の実践能力」については、2年生で下降するものの、3年生・4年生で上昇していた。「II 暖かい態度」については、1年生・4年生において比較的值が低いものの、学年による明確な相違はみられなかった。「III 資格と外国語能力」については、2年生で上昇し、その

後わずかに下降するものの、2年生以降の値にはほとんど相違がみられなかった。「IVコース運営」については、学年が進むにつれて下降していた。

## 5. 考察

本研究では、ベトナムの大学生が考える「優れた」日本語教師の行動特性を明らかにした。さらに、学年によって考え方に相違が見られるかどうかを検討した。調査の結果、ベトナムの日本語専攻の大学生の視点から、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する4つの枠組み、「I 授業の実践能力」「II 暖かい態度」「III 資格と外国語能力」「IV コース運営」が示された。このことから、学習者が考える「優れた」日本語教師像には、専門知識・指導技術、コース運営能力、資格や経験に加えて、忍耐力や異文化に対する寛容性があるという学習者と教師の人間関係に関わる行動特性が求められることが示された。この結果は、ベトナムを含む5つの国・地域の学習者が考える日本語教師像を探った佐藤・渡部(2007)の結果とは異なっている。これは、佐藤・渡部(2007)において分析に用いられたベトナムの学習者が152名のみであり、本研究においては、さらに調査対象者を増やし742名とすることによって、よりベトナムの大学生の認識を反映する結果となった可能性がある。

次に、これらの因子について学年による相違を検討した。各因子の平均から、学年によって学習者が日本語教師に求める行動特性が異なることが示された。図1の因子平均から、「I 授業の実践能力」については、2年生で一旦下降するものの、3年生・4年生で上昇している。このことから学習者の質問に答えたり明確な説明を行ったりする行動特性は、3年生・4年生でより重視されている可能性がある。次に「II 暖かい態度」については、学年による大きな相違は見られなかった。学年に関わらず、教師の忍耐力、暖かさ、やさしさ、思いやりなどが期待されていることが示唆された。さらに「III 資格と外国語能力」については、2年生で上昇し、その後やや下降するものの、2年生以降の学年においては大きな相違は見られなかった。2年生以降になると、翻訳や日本文化などの授業も行われるため、より高い専門性を持つ日本語教師としての資格や、日本社会・文化について学習者に説明するための外国語能力が求

められる可能性がある。最後に「IV コース運営」については、学年が進むにつれて下降していた。他の学年と比較して、日本語を学習始めたばかりの1年生のほうが面白く楽しい授業や、学習者のニーズへの配慮などについて期待していると考えられる。以上の結果から、ベトナムの大学における日本語教育へ次のような示唆ができる。まず、学年が低い学習者の場合には、学習者のレベルや目的、ニーズへ配慮したうえで、テスト作成やコース設計を行う能力が求められる。3年生、4年生は、基礎的な日本語に加えて、社会・文化についての様々な指導が求められるため、教師の詳細な説明や、学習者の考え・意見への配慮などの指導技術が必要とされる。また、学年が上がるにつれて、より専門的な知識と媒介語が必要とされるため、日本語教師としての資格の取得と、外国語能力の向上が求められる。さらに大学に入学したばかりの1年生と、進路を決める時期の4年生だけではなく、全学年を通じて教師の忍耐力、思いやり、寛容性という学習者に対する暖かい態度が求められることが示された。

今後の課題として、学習者が求める日本語教師像について、母語話者教師か、非母語話者教師かによってどのような相違があるのか検討することが挙げられる。本調査結果には、学習者がこれまで指導を受けた日本語教師に対するイメージや授業経験が反映されている可能性がある。そのためこれまでの母語話者教師からの受講経験の有無によって考え方に相違が見られるかという点も含めて、ベトナムの学習者が考える「優れた」日本語教師像をより詳細に分析したい。さらに、日本語教師自身が持つ教師像についても調査を行い、学習者と教師の間で考え方に相違があるのかどうか比較・検討することによって海外の日本語教師養成カリキュラムを開発・検討するための有益な情報が得られると考える。

### 【注】

- (1) 2005～2007年にかけて、日本語学習者を多く有するアジア・オセアニア地域の大学生を対象に、国際調査を実施した。本稿では、そのうちベトナムの大学生に関する調査結果を報告することとする。
- (2) 従来の探索的因子分析では、主に因子負荷量の

大きさや経験則によって質問項目を選択していた。それに対してSEFAは、複数の適合度指標を参照することで、項目の増減による因子モデルの適合度を確認することができる。そのため、どの質問項目を選択すれば、どの程度モデルの適合度が改善されるか、容易に判別可能であるという利点がある (Kano and Harada 2000)。

- (3) 検証的因子分析とは、先行研究や他の知見に基づいて、因子と観測変数の間の関係を想定し、その仮説がデータと矛盾しないかを調べるものである。探索的因子分析の結果について検証的因子分析を用いて検証することにより、より適切な結論に至ることが可能となる (山本・小野寺 1999)。
- (4) 多母集団の同時分析とは、異なるグループの違いを統計的に検討できる分析方法である。まず、制約の少ないモデルから多いモデルまで、複数のモデルを作成する。次に、それらのモデルのうち、データへの適合度が最も高いと判断されるモデルを採択し、グループ間の相違を解釈する (山本・小野寺 1999)。

### 【参考文献】

- 狩野裕・三浦麻子 (2002) 『AMOS, EQS, CALSによるグラフィカル多変量解析』現代数学社。
- 国際日本語普及協会 (1987) 「特集 教師に望む 学習者の立場から」『AJALT』10, 6-19。
- 日本国際交流基金 (2006) 『海外日本語教育機関調査』。 [http://www.jpff.go.jp/j/japan\\_j/oversea/kunibetsu/2006/vietnam.html](http://www.jpff.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2006/vietnam.html)
- 佐藤礼子・渡部倫子 (2007) 「学習者が求める日本語教師の行動特性—学習年数による相違—」『留学生教育』第12号, 1-7。
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月 (2006) 「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書』(課題番号16320068, 研究代表者・中川良雄), 94-105。
- 保坂芳男 (2004a) 「理想的な英語教師像に関する実証的な研究—普通科高校における生徒へのアン

ケートをもとにして—」『日本教科教育学会誌』第26巻, 第4号, 9-18。

保坂芳男 (2004b) 「理想的な英語教師像に関する実証的研究 (2) —PM理論を用いての生徒の学力差による構造比較—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部, 53号, 181-286。

山本嘉一郎・小野寺孝義編著 (1999) 『Amosによる共分散構造分析と解析事例』ナカニシヤ出版。

渡部倫子・佐藤礼子・狩野不二夫・縫部義憲 (2006) 「日本語学習者が求める日本語教師の行動特性—ニュージーランドの高校生と大学生を対象として—」『日本教科教育学会』第29巻, 第1号, 日本教科教育学会, 59-68。

Kano, Y., and Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika*. Vol.65, No.1, 7-22.

Moskowitz, G. 1976 Competency-based teacher education before we proceed. *Modern Language Journal*. Vol.60, 18-23.

Bộ Giáo dục và Đào tạo (ベトナム教育訓練省) (2002) 『Chương trình khung giáo dục đại học -Ngành Tiếng Nhật』(高等教育における基礎カリキュラム・日本語)。

### 【付記】

本調査は平成16年度～17年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究」(研究代表: 中川良雄, 課題番号: 16320068) の一環として行われたものである。

### 【資料】調査に用いた質問項目 (日本語版)

- Q1 自分, 他者, 人生について楽観的である。
- Q2 日本語教師として十分な訓練を受けている。
- Q3 教えることに熱心である。
- Q4 標準的な日本語を話すことができる。
- Q5 明るく, ユーモアがある。
- Q6 プロとしての自覚を持っている。
- Q7 異なる言語や文化に対する寛容性がある。
- Q8 世界経済・国際問題について幅広い知識がある。
- Q9 楽しんで教えている。
- Q10 日本語を1つの言語として客観的に分析するこ



- とができる。
- Q11 必要なら教科書に出ていないことも教える。
- Q12 外国語としての日本語教授法に熟達している。
- Q13 学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。
- Q14 学習者からの提案や考えを取り上げる。
- Q15 勤勉である。
- Q16 学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる。
- Q17 言語学の基礎的な知識がある。
- Q18 学習者をほめたり、励ましたりする。
- Q19 授業がきちんと構成されている。
- Q20 学習者の能力に合わせて授業を進める。
- Q21 暖かく、やさしく、思いやりがある。
- Q22 学習者に日本語で話すことを促す。
- Q23 多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いる。
- Q24 日本語以外のことについても相談にのってくれる。
- Q26 指導経験が長い。
- Q27 日本の文化・習慣・歴史について幅広い知識がある。
- る。
- Q28 大きな忍耐力がある。
- Q29 学習者の間違いを適切に訂正することができる。
- Q30 日本語教育に関する資格を持っている。
- Q31 授業を面白く、楽しくする。
- Q32 達成度、熟達度など、目的に応じてテストが作成でき、その結果を統計的に解釈することができる。
- Q33 日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる。
- Q34 学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。
- Q35 日本語の古典に関する十分な知識がある。
- Q36 修士号(又はそれ以上の学位)を持っている。
- Q37 教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする。
- Q38 学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる。
- Q39 以前に外国語学習の経験がある。
- Q40 学習者の感情を受け入れる。
- Q41 教室内において学習者に規律を守らせる。

## Abstract

### A Research on the Image of an “Outstanding” Teacher of Japanese

— From the Vietnamese Students’ Point of View —

Do Hoang NGAN

Graduate Student

Graduate School for International Development and Cooperation

Hiroshima University

Kagamiyama 1-5-1, Higashi- Hiroshima 739-8529, Japan

E-mail: hndo2611@yahoo.co.jp

Akiko KOBAYASHI

Graduate Student

Graduate School of Education, Hiroshima University

Kawashiri 418, Sera-cho, Sera-gun, Hiroshima-ken, 729-3302, Japan

E-mail: kobayashi@hiroshima-u.ac.jp

This study investigates the characteristics which are considered outstanding qualities for a teacher of Japanese from Vietnamese university students’ point of view. Data in the form of questionnaires were collected from 742 students studying at 4 Vietnamese universities. The results show that characteristics considered desirable in a teacher of Japanese consist of four factors 1) competence in giving instruction 2) personality 3) qualification and foreign language ability, and 4) the ability to control a course. The comparison of four academic year levels show that students of different levels desire different characteristics from Japanese teachers. Factor 1 decreased for the second-year students and increased for the third-year and fourth-year students. The averages for factor (2) were rather low for first- and fourth-year students and there were no significant differences between them. Factor (3) increased for the second-year students while factor (4) decreased as we progress up the academic year levels.